

巻頭によせて

院長 平 幸 雄

平成7年は阪神淡路大震災、サリン事件、経済の低迷など社会的にも決して明るい年ではなかったと思います。今年こそは明るい希望の年にしたいものとだれもが思っておられる事でしょう。また医療界においても平成4年4月の医療法の一部改定により、医療提供の理念が法的に明示されたのに続き平成7年5月には厚生白書に初めて「医療」が取り上げられました。インフォームドコンセントの時代となり、医療を司る者に対する第三者評価が施行され、改めて医療の内容や質が問われる時代となりました。患者さん中心の医療、社会的変化に対応すべき保健・医療・福祉関連の変化の波が次々と寄せてきております。当院もそれら変化の波に対応すべく努力をしているところであります。

さて現在を理解するにはこれまでのいろいろな歴史を知ることが大切なことであることはどなたも理解されていることでしょう。今回本誌16巻がここに刊行の運びに当たり、本院の学術活動はどうであったのか尋ねてみました。以前本院歯科におられた杉本是孝先生から貴重な資料をお借りしましたので当院における医業・研究の学術活動および発表誌の歴史をここに振りかえって見たいと思います。本院が開設されました昭和5年から院内学術活動の動きは次第に活発となり昭和12年12月に院内集談会が発足し、以後院内外の学術活動の中心になって発展してきたのであります。そのまとめとして昭和16年6月～昭和34年2月までを、医局が演題集としてまとめておりますが、これが当院に置ける医療に関する業績記録集成の始まりのようです。院内集談会はその後昭和34年1月には医局が主催の形を取り、他に薬剤師、放射線、臨床検査技師の方々を交えての診療の向上、懇親と融和を図る目的とした『譚親会』に発展しました。この良き伝統は今日まで継続しておりますことは皆さん御承知のとおりです。昭和34年4月1日、内科丹野三男先生、歯科杉本是孝先生、外科菊地弘一先生がたが御尽力され仙台市立病院医誌が刊行され、以後昭和40年4月の7巻まで継続発刊されました。ここまでの資料は当院図書病歴室には無かったが、これを機会に復元して図書病歴室に永久保存することにしました。さて、当院医誌はその後暫く休刊していましたが昭和55年6月に外科的場直矢、渡辺至、内科大滝正道、伊藤明一の諸先生たちの御努力により仙台市立病院医学雑誌として再刊され、医学中央雑誌、国立国会図書館に登録されました。その後今日まで、その後の編集幹事の情熱とご努力によりここに第16巻の発行を見ることになったのであります。編集に当たり日常の診療、その他の業務でご多忙の中で古川副院長はじめ編集委員の方々のご苦勞に厚く感謝するものであります。

当院に課せられた自治体病院としての役割を十分理解して頂き、その中の大事な役割の一つでもあります院内・外の研究と教育・指導に付いても関係各位の一層のご努力と継続をお願いするものであります。基本にはあくまでも忠実に、そして常に新鮮な思いを持って事に当たり、その業績の積み重ねを継続することにより、医学、医療の面に寄与する優秀な論文として集大成するものと確信するものであります。本誌に多数の論文をのせられた各著者の労に心から謝意を表し、今後の更なる発展を期待するものであります。